コウライテンナンショウ

Arisaema serratum

サトイモ科

コウライテンナンショウ

名前の由来

漢名に由来した名前で、天南星は漢方で用いる塊茎の部分を指す名前。高麗は高句麗ともいい一般に朝鮮を指すが、なぜこの植物に用いられたかは不明。別名マムシグサ（蛇草）ともよばれ、鞘状葉や茎の色彩がマムシに似ることによるが、マムシグサの名前はこの植物を指して言う場合もあれば、よく似た近縁種も含めた総称として用いられる場合もある。漢字名：高麗天南星

形態的特徴

高さ30～80cm、茎は緑から濃紫色で、白いまだら模様がある。葉は鳥足状の複葉が2枚つき、各々が5～12個の細長い小葉に分かれる。茎の先に棍棒状の肉穂（にくすい）とよばれる小さな花の集合体があり、これを仏炎苞（ぶつえんほう）と呼ばれる苞葉が筒状に取り囲む。仏炎苞は緑色で白いしまがあり、上方は筒に覆い被さるように折れ曲がる。果実は球形で赤色に熟す。

〈上〉コウライテンナンショウの仏炎苞。
〈右下〉仏炎苞を開くと中に花の集まった肉穂がある

〈上〉コウライテンナンショウの雌花
〈右上〉雄花
〈右下〉雌花と雄花を両方持つ肉穂

コウライテンナンショウは塊茎に蓄えた貯蔵物質の量によって、性転換する

類似種と見分け方

ヒロハノテンナンショウ。ヒロハノテンナンショウの葉は1枚で、それが5枚の幅広い小葉に分かれる。

生活サイクル

	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
開花期												
結実期												

生育環境・分布

林内に生育する。

分布：国外分布は、千島・朝鮮・中国東北部。

国内分布は、北海道から九州。

北海道内分布は、全道的。

十勝地方では、林内で見られる。

コウライテンナンショウ。出たばかりの若芽

生活史

開花時期：5月下旬～6月

開花までの年数：不明

寿命：多年草。

他生物との関わり

花には虫が訪れる。

興味深い話

■この種を含めてサトイモ科のテンナンショウ属の植物は、雌雄異株であるが、性転換をすることで知られている。芽が出て数年は葉のみを広げ、地下にある塊茎に貯蔵物質を蓄え、ある一定の重さになると花茎をのばし雄花をつける。さらに塊茎が重くなると、ある年突然雌花をつける。しかし地上部が折れたり栄養状態が悪くなって、塊茎の重さが減少すると、雄花をつけたり葉だけの状態に戻る。このように、前年までに塊茎に蓄えた貯蔵物質の量によって、翌年が葉だけの状態か、雄花の状態、雌花の状態かが決まる。

■この属は一般に有毒植物であるが、中国では薬用植物として去痰、鎮痙薬などとして使われてきた。また生の塊茎をすりおろしたものを腫れ物、肩こり、リューマチ、胸痛などに外用するとよいという。

■十勝地方などのアイヌ語で「ラウラウ」と呼ぶ。アイヌの人たちは、晩秋に握りこぶし大になった塊茎を掘り出し、根を切り取って熱灰で焼くか、蒸すかして食べた。その際真ん中（上部）の黄色いところに毒（アルカロイド）が含まれるので必ずそこをえぐり取って食べたという。また、若い時期の塊茎はこの毒が全体に広がっているため、採集時期をまちがえると中毒を起こすので注意が必要だった。

■塊茎の毒のあるところをなめると手先までしびれてきて治るまで10日もかかった、開拓当時食べてみると３日間口がしびれた、塊茎の真ん中を食べると舌が回らなくなる、などと言われる。

■薬効としては、焼いたものをつぶし布と布との間に入れて足のそこに貼りしばっておくとオコリ（瘧）が生じない、神経痛には有毒のところをすり下ろし布や紙に貼って患部に当ててしばる、頭痛には刻んだものを布に包んではちまきする、虫下しには黄色いところを丸飲みする、赤い実を干したものを腹痛の際２～３粒飲み込む、ただしかむと口が腫れる、などと言われている。

コウライテンナンショウの実

配慮事項

生育している環境全体が大切である。

参考文献

「改訂版　牧野新日本植物圖鑑」牧野富太郎　北隆館　1989

「北海道植物図譜」滝田謙譲　自費出版　2001

「日本の野生植物　草本Ⅰ」佐竹義輔・大井次三郎　他　平凡社　1982

「サトイモ科テンナンショウ　週間朝日百科　植物の世界123」邑田仁　朝日新聞社　1996

「トピックス　植物の『雄・雌』と性転換　週間朝日百科　植物の世界111」木下栄一郎　朝日新聞社　1996

「北海道薬草図鑑　野生編」山岸喬　北海道新聞社　1992

「広辞苑第三版」新村出　岩波書店　1983

「アイヌ植物誌」福岡イト子　草風館　1995

「アイヌ語で自然かんさつ図鑑」帯広百年記念館（編）、内田祐一・池田亨嘉、帯広百年記念館友の会　2004